

ドキドキな私の気持ち

一才

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

初めて書いてみました。

最近ハマっている作品です。

原作ネタバレあり、捏造、オリジナル解釈ありです。

原作の桃がどういう感情なのか気になってしまい、桃視点で書いてみました。

目次

第1話

—

1

第2話

—

8

第1話

帰り支度をしている私に近づくと小さな影。

角としつぽの生えた小さな女の子が私に近づいてくる。

「あつ桃！ 買い物があるので先に帰っててくださいね」

それだけ告げると教室を去っていく。

小さなまぞく、シャドウミストレス優子、略してシャミ子は、私がしばらくの間学校を休んでいたころからよく家に来るようになった。

休んでいた原因はシャミ子によるものなので、罪悪感からか私の身の回りのことを手伝ってもらっていた。

しかし治つた後もシャミ子は私の家に来るようになった。

きっかけは私の食生活である。

休みの期間中、いやそれよりも前から、私は食事を粗食で済ませていた。

主にパン、スナック菓子、ジャンクフード、ウインナーだ。

元々学校でも弁当を持ってこず、菓子パンなどで済ませることがほとんどだ。

食事に興味のない私は、これで構わないと思っていた。

しかしシヤミ子は違ったようで、体もほとんど回復してきたころ。

「シヤミ子、今日も修行お疲れ」

「ふへーもう足がパンパンです…」

体力づくりとりハビリの一環で、ランニングしながら学校から私の家まで競争をしてきた。

負けたほうが今日の料理を作るという罰ゲーム付きである。

最初こそ頑張つてついてきたが、終盤は完全に体力が切れ、フラフラしながらついてきていた。

部屋に入るなり疲れ果てたのか、テーブルに突っ伏してくたびれている。

「じゃあ罰ゲームはシヤミ子だけど…今日はいいや」

「む？なぜです？桃」

「シヤミ子疲れてるでしょ、別に食事なんてなんでもいいし、今日は帰っていいよ」

するとシヤミ子は頬を膨らませ、むっとした表情に切り替わる。

「桃、前々から思っていたのですが…桃は変わらなければなりません！」

「え？」

「健康な精神は健全な食事で備わります！ちゃんとしたごはんでは元気になる。桃！これからごはんをしっかり食べるのだ！」

体を起こし語気を強めて語ったが、疲れがあるためか、生まれたての小鹿のような足取りでキツチンに向かつていった。

意外と頑なな部分のあるシャミ子、心配してくれているのか、それからシャミ子は頻繁に家へ食事を作りやってくるようになった。

その純真な気持ちに少し心がドキドキする。

最近私を感じている感情だ。

正体不明のドキドキ、主にシャミ子がかかると発生する病気？だ。

体がだるいとかそういうのはないけれど、その病気は顔に熱を送り、心臓の鼓動が早まり、シャミ子のことをついつい考えている。

そんな病気だ。

いけないいけない、またシャミ子のことを考えてる。

そそくさとプリントを机に詰め込み、買い物から帰るまでに掃除を終わらせておこう、そう考え自分の家の帰路をたどった。

一通り掃除を終え、ソファアに座るとチャイムが鳴る。

ご丁寧^ごにシャミ子は必ず一度チャイムを鳴らして家に入ってくる。

「敵地に赴くときは必ず名乗りが必要ですから」

なんていつの時代の戦国武将か、良ちゃんの口添えかわからないが、そんなこんなで必ず名乗りを上げ家に入ってくる。

「シャドウミストレス優子参上！さて今日は何にしようかな」

買ってきた食材を冷蔵庫に詰めていく、最近の我が家の冷蔵庫はシャミ子の買った商品でいっぱいだ。

ウインナーぐらいしか入ってなかった冷蔵庫は、作り置きシャミ子のごはんと食材で埋め尽くされてる。

「桃うどんがまだ残っているので、今日はうどんがいいですか？」

「うん、シャミ子の料理はどれもおいしいから嬉しい」

「なっ！そんなこと言ったって何も出ませんよ！しかたないのでお肉1.3倍増し増しです！」

シャミ子は手際よく調理の支度を始めた。

料理が出来上がるまで手持ち無沙汰になったので、ソファに座りテレビをつける。

テレビには最近のニュース、後ろではカチャカチャと食器や調理の音が響く。

ああ、なんかいいなあとふと昔を思い出す。

姉がいたころはそういえばこんな音がしていたなあと目を閉じそつと音に耳を傾け

た。

「桃? どうしました?」

「え…あつ…」

目を開くとシヤミ子が私の顔を覗き込んでくる。

後ろのテーブルには出来上がったうどんが二人分。

寝てしまった? 私の顔をじつと見つめる表情を見るとふいに心がドキドキしてくる。

無意識に私はシヤミ子の腰に手を回していた。

「ふなななつああ!?! 桃!?!」

「ごめんシヤミ子、すこしだけいいかな? ……体の筋肉量を確認させてもらおうよ」

つい口に出た言い訳だが、納得したのかシヤミ子は私に体を預ける。

抱きかかえるような形でシヤミ子の体を私の体に密着させる。

「どうですどうです?」

「んーちよつとたくましくなったかな?」

「そうでしょうそうでしょう! この前はお米の3kgを持ち帰ることができたんですよ

!」

やわらかな胸部、細い腰つき、柔らかな髪、ちよつと力を入れたら壊れそうな体。私よりふんわりした身体は、筋肉がほとんど感じられない非力な肉付きだ。

「桃？」

体の小さなシャミ子は、私の胸元から目線を合わせるので、自ずと上目遣いになる。特徴的な角よりも私の眼を奪われるのは、大きく丸い瞳、ふわふわとした髪の毛、ちよつとだけ生えている牙、薄いけれど血色のいい唇。

やっぱりよく見るとシャミ子って…

いやこれ以上はあまりよくない、なにか間違っている気がする。

急速的に心臓が高鳴り、ドキドキした気分が高揚してくる。

「う、うん、だいたいわかったかな」

冷静を装い、シャミ子を開放する。

「どうでしたか？前よりは強くなったでしょう！」

「んーまだまだかな、今度はバーベルを持てるように頑張ろうね」

「ぐぬぬ…これで勝ったと思うなよ！」

捨て台詞を吐くシャミ子は私の向かいに座った。

最近をよく目にするこの光景。

なぜか姉の姿を投影してしまう。

シャミ子の姿は似てないけど、ついつい姉の姿が重なって見えてしまう。今は昔よりも…辛くはないかな。

「それではいただきます。桃も早く食べないと冷めちやいますよ？」
「あぁうんいただきます」

湯気立ち、ちよつとだけシャミ子より多いお肉、シャミ子は

「別に特別なレシピじゃないんですけどね？」

なんて言うけれど、私のために作ってくれた料理は、なんだか特別で、いつも美味しく感じる。

ドキドキの正体はわからないけど、きつとこの気持ちが変わる日が来るんじゃないかと、私の好物になったうどんをシャミ子と頂く私であった。

第2話

「私の…シャドウミストレス優子の配下になれ」

私と姉の好きな場所で言われたその言葉は、シャミ子の全てを表していた。

まぞくの女の子、あくまでミストレスとしての関係性を求めた。

それは人によって聞こえの悪い表現だが、私にはそのやさしさに心が救われた。

あくまでも協力者として、仲間としての信頼を。

シャミ子はそれを私に求めてきてくれたのだ。

「眷属…か」

自室で着替えをしながらふと言葉が漏れる。

シャミ子のお父さんの一件、あまりにも衝撃的な内容に、私はその場から逃げるように立ち去ってしまった。

私の姉が原因でシャミ子のお父さんは箱に閉じ込められてしまった。

その事実が動揺してしまったからだ。

あいさつも無く立ち去ってしまったことをシャミ子のお母さんに謝らないといけな

い。

そしてお父さんの件についても今一度謝りたいと思っていた。

「菓子折り…は箱だからだめか」

シャミ子のお母さんにどんなお詫びの品を持っていけばいいか相談したかったが、シャミ子は携帯電話を持っていない。

自宅に電話をするのも、お母さんに出られると応対に困るので難しい。

お詫びの品の定番でもある菓子折りも、箱に閉じ込められているということを連想させてしまいそうで、ちょうどよさそうな物が思いつかない。

「仕方ない、シャミ子の家に行こう」

直接会って相談しよう、ちょうど夏季休暇中だからおそらく家にいるだろう、そう思い家を出た。

シャミ子の住まい、ぱんだ荘に近づくと、なぜかミカンの魔力の波動を感じた。

朝の修行から戻ってくると、いつの間にか荷物をまとめていたミカンは部屋を借りると言い出して出て行った。

そんな彼女がどうしてこんなところにきているのだろうかと思ひ、ミカンのいるであろう部屋を開けると、シャミ子とミカンが笑いあっている。

「私ここに本棚を置いてここにテレビを置きたいの」

「私はゲーム機を持つてくるので対戦しましょう!!」

「それは楽しそうだね」

「桃!?!」

その姿をみて私はちよつとだけイラツとしてしまった。

何が不愉快か、わからない。

けどちよつと、ほんの少しだけ、シャミ子が私を残して仲良くしているのが…

そのあとリリースさんに煽られポイしたので多少は気は晴れたが。

しかし最近の私はどうもおかしい

一時期はシャミ子に対してドキドキするだけで、ここまで不安や苛立ちはなかったのに、シャミ子の行動にいちいち反応してしまう。

時々声が聞きたくなる時もあるし、しばらく会えないとモヤツとした気持ちになる。

シャミ子の隣の部屋に住み着いたのも、連絡が取りづらいからというのが本命だが、家で会うよりも顔を見る機会が増えるという理由がある。

自分のつぶやいたーのアカウントを教えたのも連絡が取りやすくなるという面があるからだ。

ただ…一つだけ冗談で流したが、本心に近い気持ちがある。

「シャミ子のことをもつと知りたいたいから」

この言葉は照れくさくてごまかしたが、限りなく本心だ。

姉を探すために行動を共にする、それも間違っていない。

けどそれと同じくらい、シャミ子とともに過ごしたいという気持ちがあった。

だからこそ、姉との思い出のあるあの家から出て、シャミ子の近くに引越したのだ。

それからつぶやいた一でアカウントを教えた翌日。

部屋の中での修行は壁の薄いこのアパートだと近所迷惑だと思い、河原で朝の修行を行っていた。

水で満たされた石の水瓶をダンベルの要領で持ち上げているとき、置いた水瓶の水面に自分の顔が映った。

ピンクの髪につけられた黒い髪留めが朝日と水瓶にキラつと反射する。

そういうえば…髪留めのお礼をしていないことを思い出した。

約束のしるしとして貰った髪飾り、今度は違うものを私から送りたい。

さて、どこで買おうかな？

あまりそうだったプレゼントの知識のない私には何を買ったらいいのかよくわからない。

ミカンに良さそうなのを聞くのも…今はまだ寝てるかもしれないから…ん？ミカン…そうだ。

いいことを思いつき、朝の修行を終え、ぱんだ荘へと帰宅する。

外からおいしそうな朝ごはんの香りが漂う玄関をノックし、シャミ子に部屋へ招き入れてもらう。

「図らずも、朝ごはんをごちそうになり、温かな和食をいただきながらシャミ子に話を持ち掛ける。

「シャミ子、ミカンの引越し祝いになにかお祝いの品を買おう、もちろんミカンには内緒で」

「いいですね！わかりました。それではこの後、商店街に向かいますよ」

これでミカンのお祝いの品を買いながら、シャミ子に髪留めのお礼を買うことができる。

「あら、じゃあ優子、これを授けましょう」

「お、お母さん、これは!？」

「そう、優子!これは野口さん…お小遣い2か月分です!」

シャミ子の手のひらに野口さんが渡される。

「私たちの家計もだいぶ楽になりました。これも桃さんとミカンさんのおかげです。これからも共に過ごすならお礼は大切です」

「わかりました!これだけあればきつとドデカイスゴイやつが買えますね!」

「そんなに凄いのは買えないんじゃないかな…?」

一か月四万円生活の頃では嗜好品はなかなか買えないのだろう、野口さん程度の金額でシャミ子はキラキラとした笑顔を輝かせている。

「ごちそうさまでした。それじゃあ着替えてくるね、また後で」

朝ごはんをいただき、私服に着替えるため、自室に戻る。

着替え終わり、シャミ子が出てくるのを待つと、しばらくしてシャミ子が階段から降りてくる。

フリルのついた白のワンピース、ふわつとした服装で妖精のような風貌で可愛いらし

い。

「じゃあ今日は町に繰り出しましょう！」

「うん、いこうか」

私はジーンズに猫のイラストが入ったTシャツとチエックのシャツだ。

…みかんの服は毎回着ていくには恥ずかしいので、多少はマシな服を着てきたつもりだ。

「そういえば、リリスさんはどうしたの？」

シャミ子のトレードマークでもあるご先像、リリスさんが封印されている像を持ち歩いている彼女だが、今日は珍しく持っていない。

「ごせんですか？実は昨日、ワインつてのをいただいたのですが…」

「ああ…ワイン…そういうことか…」

皆まで聞かなくてもわかる。

おそらくワインをお供えされたリリスさんはその懐かしさから飲みすぎてしまい、意思疎通もできないくらい二日酔いになってしまったんだろう。

「はい…「これはワイン!!?懐かしい…懐かしい」と泣きながら凄い勢いで飲んでいたよう
で」

案の定だった。

しかしこれでリリースさんに茶化されることなく、今日の内にプレゼントできそうだ。それに図らずも二人つきり：リリースさん抜きは髪飾りをもらった時以来だった。

「じゃ、じゃあいこうか」

「?しゅっぱーっ!」

あの時を思い出して、少し動揺してしまつたが、顔には出さず、シャミ子とともに商店街を目指す。

しばらく歩くと商店街、シャミ子の家から商店街はそれほど距離がないためすぐに着く。

「おーちよもも、シャミ子!お二人さんデートかい?」

そんな商店街にあるお肉屋さん、その家業のお手伝いをしているシャミ子のクラスメイトの佐田杏里が、私たちの姿を見つけたのか、声をかけてくる。

「なな!?杏里ちゃん!?デートではありません!これはみかさんのプレゼントのためで」

「そうだね、デートではないね」

「え、桃なんでちよつと不機嫌なんですか?」

デートではないと一刀両断され、ちよつと嫌な気持ちになつてしまふ、いや確かにデートではないけれど…

「別に不機嫌じゃないよ、それより杏里この辺に手頃なプレゼント用品を扱っているお店ってある?」

「ん?ここに手頃なお肉が」

「さすがにお肉はいらなかな」

「プレゼント用品?最近できたアクセサリーショップがあるくらいだけど:」

「それです、それです!そのお店はどこにあります?」

「ここから少し行つた所にあるよー道なりだから迷うことはないと思うけど」

「ありがとうございます!また今度お肉を買いに来ますね」

「お、ありがとうございますも、シャミ子じゃあねー」

道なりに進むと、確かに窓越しからアクセサリーの飾られたお店が目についた。

店内に入ってみると、いろいろな小物が所狭しと並んでいて、ここならなにかいいものがあるかもしれない。

ネックレスやピアス等の貴金属は値段が高いので、ネクタイやハンカチ、リボン等のコーナーを探してみる。

店内を物色していると、シャミ子が突然裾を引っ張つてきた。

「桃!桃!これどうですか!」

シャミ子が見つけたのはデフォルメされたいろいろな柑橘類が描かれたハンカチだ。

「すごい……ぴったりな商品だよ！」

「そうですね！ミカンさんといえばかんきつ！」

値段も手ごろで、シャミ子と私でちょうど折半できる金額だ。

「じゃあ買ってくるよ、シャミ子お金もらえる？」

シャミ子はいつものビニールから野口さんを取り出すと、私に預けてくれた。

外で待つてるよう伝え私はお会計を済ませる。

帰り道、残ったおつりで商店街の薄皮いちご大福を買い、多魔川の河川敷まで散歩し、

土手に座って半分こする。

シャミ子は満面の笑みで、大福に齧り付いている。

姉との思い出のあった大福は、今では普通に買えるようになった。

昔の私と向き合うこと、それと同じくらいシャミ子とのこれからの繋ぎたい。

「シャミ子、今日はありがとう」

「いいいえ、いいものが買えてよかったです。きつと喜んでくれますね！」

シャミ子の渡した紙袋、それとは違う紙袋を私は取り出す。

「これ、シャミ子に渡そうと思って」

私が差し出したのは大きめの赤いリボン、ミカンのハンカチを買うときに一緒に買っ

ておいたものだ。

「髪飾りのお礼、まだしてなかったから私からも約束のしるしに」

「え!? だってあれは」

「いいからじつとして」

彼女の首元に蝶結びで赤いリボンをつけてあげる。

白いワンピースと相まって、妖精感はぐっと増した。

「えへへ、なんだか首輪みたいですね」

笑みをこぼすシャミ子に、心のドキドキが最高潮に達し、思わずその場にうづくまる。

「!? 桃大丈夫ですか?」

ああやっぱりそうだ。

このドキドキはそういうことなんだ…

私は彼女が好きなんだ

「うん…大丈夫、気に入ってくれた?」

「はい! ありがとうございます桃! 大切にしますね!」

もし、彼女が大変なことになってしまったら、私の全てを賭して救ってあげよう。

そう誓い、私は彼女と一緒にぱんだ荘へと帰って行った。

それからどしたの

「ごせんで、体調大丈夫ですか？」

「うむ、もう万全だ！ところでシャミ子よ？そのリボンはなんなのだ？」

「これですか？宿敵桃からもらった物です！大事に押入れに入れておきます！」

「ふむ…あなたに首つたけつてところかろう…うぶよのう…」

「ごせんでどうかしました？」

「いいやなんでもない、そのリボンは時々つけたほうが効果的だぞシャミ子よ」

「けど汚したりなくしたりしたくないので…」

「ああうぶとうぶが重なって初々しいのう」

「え？どういう意味です？」

「気にするな…お主はそのままでもいいんじゃないや…そのままで…」

「???」

頑張れシャミ子！いつか彼女の気持ちに気づいてやるんだ！